

ロシアにおけるフロベール概観

(1857~1870)

—「白痴」における「ボヴァリー夫人」・序—

池田和彦

(1) 序

「白痴」の終局近い第4編第11章には、結婚式を逃げだしたナスターシャを探る彼女の部屋を訪れたムイシュキンが、机の上に開かれた「ボヴァリー夫人」を手に持ち去るエピソードがある。¹ドストエフスキイがこのようないわば小説に登場させる場合、何らかの意図を込めてのことが多く、それらの多くは今日読み解かれている。しかし「白痴」の「ボヴァリー夫人」に関しては、1922年のグロスマンの指摘がありながら、ここになぜ登場してくるのか本論に論じられたことがない。²これにはいくつか理由が考えられる。³その一つは1860~70年代のロシアのいわゆるリアリズム文学には、西欧のリアリズム文学の影響はあまりないとされ、この分野の研究が十分行われていないことがある。フロベールについても同様で、「ボヴァリー夫人」が登場してくる背景も定かでない、何か場違いなものが出てきたように黙過されてきた。しかしこの小説についても、物語で何らかの役割を担っていないか、一度問われてよい。本稿はこのを考える準備作業として、「白痴」執筆前後までにフロベールがロシアでどのように紹介されていたかを概観し、ドストエフスキイが「ボヴァリー夫人」をどのように利用する地盤が、限られた範囲ながらロシアの読者の間にあったことを明らかにしたい。またこの概観はフランスのリアリズム文学のロシアへの紹介状況、同時代の西欧文学がどのように読まれていたかを考える材料も提供しよう。ここでは「ボヴァリー夫人」の反響が現われる1857年から、「感情教育」の反響、批評が現われる1870年までを扱おう。⁴なお参考に本稿で触れるフロベール関係の批評や翻訳をイギリス、ドイツでの翻訳と対比して年表に示しておく。ロシアでのフロベール紹介が、両国の翻訳と比べてかなり早かったことがわかる(註5.参照)。⁵

(2) 「ボヴァリー夫人」

1856年10月~12月「パリ評論」に発表された「ボヴァリー夫人」は、翌57年2月始め「ボヴァリー」裁判に勝訴し、4月に単行本として出版されると爆発的な売れ行きを示した。このニュースは早速ロシアにも伝わり、いくつかの反響が現われる。その最も早い時期のものに、ニコライ・サゾーノフの紹介記事（「祖国雑記」NO.5,7）がある。

彼はまず5月号の「フランスの雑誌、本、パンフレット概観1~3月」で「ボヴァリー夫人」が評判になっていることを報じ、次のように論評した。

《小説から見てフロベール氏が観察することに長じていることは明らかだ。しかし（少くとも現在のところ）彼は観察する人物と事物との相互関係を明確にできず、出来事の原因、原動力を示すことができない。（中略）主題は面白いが、作品は法外に冗長だ。小説には多くのエピソード的な人物が、何の説明も有機的なつながりもなく登場してくる。力強い現代的な才能の萌芽はうかがえるが、小説は下手だ。》⁶

フロベールに関する記述は1頁ほどにすぎない。しかし、「ボヴァリー」裁判後単行本発行までの2ヶ月半、この小説を論評した新聞、雑誌がパリで一つしかなかった時期に、⁷サゾーノフが限定つきながらいち早くフロベールに「力強い現代的な才能」を認めたことは注目される。

彼は7月号の同名の記事でさらに詳細に「ボヴァリー夫人」を論じた。しかしこの小説をとりあげるのは、小説の成功がフランスの道徳的、知的状況をよく特徴づけるからだと断わっていて、⁸小説に対する否定的な評価は変えていない。

彼はこの小説の流行の原因を、絵画のポール・ド・ラロシュや文学のシャルル・ベルナルの流行にならぞえて説明する。即ちド・ラロシュは新しい傾向を表面的に借りて従来のもので折衷して時流に乗り、ベルナルもバルザックほど独創的、大担でないためブルジョワによく読まれた。フロベールも同様だと、次のように述べるのである。

《その主な理由は同じだ。即ち文学や絵画でシャンフリーやクールベほど独創的でない、それ故ブルジョワにそれほど侮辱的でない表現を見つけることが、リアリズムのために不可欠だったからだ。（私は彼らを天才的だと言うつもりは少しもないが、彼らは文句なく独創的だ。）（中略）シャンフルーリのような

労働者でなく、クールベのような農民でもない、まさにブルジョワのなかから巧みな観察者、地主で有名な金持ちの医者の子が現われ、ブルジョワに奉仕したのだ。『どうしてリアリズムに驚くのです、と彼（フロベール訳者）は言う。私はリアリズムをあなた方の要求に適応し、私のノートから事実を借りて、あなた方がどれだけ愚かで無気力で俗悪であろうと、あなた方を欺く奥さんはさらに悪いと示しただけなのです。』》⁹

作品そのものに関してはこの小説を伝記小説と規定し、このジャンルの作品の特徴である統一性や劇的な面白さの欠如、想像力や造形性の不足が「ボヴァリー夫人」にも見られると言う。そしてリアリズムと伝記小説の関係や、サント・ブーヴの「ボヴァリー夫人」評に関連して、およそ次のように論じる。

——バルザック後の群小作家は、バルザックが自分の理想主義的な思想体系の土台にしたにすぎないリアリズムに没頭した。リアリズムは必然的に伝記小説を生むもので、その代表者ディケンズとサッカレーは架空の人物の伝記小説を書いた。二人は、様々な運命の変転のなかでも、なおその人物の本質的な性格を失なわぬ登場人物を描くように努めた。そのため我々は、たとえば「虚栄の市」のヒロインの同一性を疑わない。伝記小説はそうあってこそ芸術的、道徳的意味を持つ。人物を創造し育てること、様々な闘いに敗北、そして勝利、こうしたものが現代芸術の価値ある対象だ。しかし「ボヴァリー夫人」にはこの価値が欠けている。小説では伝記的性格が誇張され、シャルルの両親の生活まで詳細に描かれるが、彼は少しも両親に似ていない。真の芸術家にあっては、些細な細部も思想や作品全体の本質と結びついている。フロベールはそうしたことの必要を考えない。自分のノートから取ってきた様々な出来事を遠慮なく描き、これに戯画的な説明を加えるだけだ。サント・ブーヴは「ボヴァリー夫人」が客観的に書かれ、作者が作品に顔を覗かせていなことを賞賛した。しかし小説にはフロベールの個人的な体験や思い出だけでなく、秘められた嫌悪や憎悪が透けて見える。ブルジョワの女性の愚かさを描いた「ボヴァリー夫人」は、女性全体、特に田舎の女性に対抗するパンフレットであり、G.サンド流の女性解放論に対するブルジョワ男の長年の憤懣を慰める役割を果たしたのである。——¹⁰

サゾーノフは最後に「ボヴァリー」裁判の判決文を紹介し、無罪判決が下され

たことを高く評価して評論を結んでいる。「6月22日、パリ」の署名があるこの批評は、「ボヴァリー夫人」がフランスで目覚ましい売れ行きを示したさなかに書かれたものである。

サゾーノフの二つの批評で特徴的なのは、「ボヴァリー夫人」の道德性をめぐる議論が多かったなかでこの点をあまり問題にせず、小説の成功の理由をブルジョワ向きのリアリズム文学が現われたことに求めていることである。ブルジョワから反発を浴びたクールベやシャンフルーリのリアリズムの階級性を意識した彼の指摘は、今日の研究からも裏づけられる面を持つ。¹¹ 芸術家の出身階層や描く対象から作品の階級性を説いたところは、マルクスと文通し「共産党宣言」の露訳も試みたというサゾーノフの面目が表われていると言えるかもしれない。¹² 特にフロベールに比べ、クールベやシャンフルーリを評価しているのは当時としては珍らしく、彼の党派的と言えるような反ブルジョワの姿勢がうかえる。¹³ また「ボヴァリー夫人」をG. サンド流の女性解放思想に対する反フェミニズム小説と述べているのも、当時の読者ならではの読みといえよう。

サゾーノフは文学上の評価においても、「ボヴァリー夫人」を伝記小説のジャンルに位置づけ、この小説の欠点と彼がいう統一性や劇、想像力や造型性の不足が、伝記小説というジャンルそのものの性格に由来すると、大きな枠組から論じている。ディケンズやサッカレーの主人公に統一的な人格があるのに対し、「ボヴァリー夫人」にそれが無いといっているのは、後述するE. トゥールやフランスの批評家も指摘しており、「ボヴァリー夫人」の人物造型の新しさを感じとった表われと見られる。同様に登場人物と物との相互関係が明確でないこと、事件の原因が定かでないことを指摘しているのも、意味づけのない物の描写が従来の小説に比べ異常に多く、人物の心理や事件の展開について説明がないこの小説の新しさに抵抗を覚えたためと考えられる。¹⁴ 反ブルジョワという立場もあり、観察眼はあるが小説としてはまだ未熟だというのが全体的な評価である。しかしこの評論には、ゲルツェンが語ったようにおそらく当時第一級の西欧芸術通であったサゾーノフの豊かな知識が見られ、フランス本国の批評に劣らぬ独自の見識を示している。¹⁵

サゾーノフの批評と前後して、ロシアではこの頃早くも「ボヴァリー夫人」の翻訳の動きが現われた。そして検閲にあたったのは、ドストエフスキイの青年時代からの友人アポロン・マイコフであった。彼は6月19日の検閲会議で、「この小説には、淫蕩な空想をほしいままにふける人妻の密通が描かれている」と、翻訳

の許可を躊躇する報告したという。¹⁶ 翻訳は結局翌1858年に出されたが、「パリ評論」での発表から約半年、単行本刊行から二ヶ月でこうした動きが具体化しているところに、「ボヴァリー夫人」の反響の大きさがうかがえよう。

「ボヴァリー夫人」の紹介は、こうした検閲の壁にもかかわらず続けられた。その一例が、E. トゥールの評論「フランスの風俗小説：フロベールの『ボヴァリー夫人』」（「ロシア報知」NO. 7）である。25頁ほどの作品の梗概を含む約40頁の評論で、「ボヴァリー夫人」の紹介を詳細な梗概によって補う役割を果たしている。

トゥールは始めに、裁判で無罪になった「ボヴァリー夫人」の道徳性が今や読者に問われていると述べ、この小説がはたして不道徳でないか問う。¹⁷そして作家は自由に描く対象を選んでよいが、作中人物や彼らの情熱、意欲に対する作家の見方に作品の道徳性がかかってくると述べ、次のように言う。

《フロベール氏の小説の人物たちについて、どう言えばよいでしょうか。彼らには少しの特徴も刻印もありません。性格もなければ性格を創りだそうというほんの少しの試みも見られません。作者は主要人物の資質や欠点、性癖や特徴をどこにも語らず、ただ習慣や趣味、そして特に肉体的感覚を描くばかりです。彼は詳細に肉体の美しさや醜さを描い見せ、ほんの些細なことも見逃さないのです。》¹⁸

そして醜悪な場面を無頓着に描き、人生の神聖なものすべてを軽蔑するフロベールの態度を批判し、彼の小説に何か大切なものがあるか問う。恋がそうかといえ、描かれた恋はただ感覚を求める本能的な恋である。エンマは始めから墮落していて、作者はどうして彼女がそうなったのか語らない。彼女は思考力のない感じるだけの存在だと指摘して、さらに次のように続けるのである。

《特に侮辱的なのは、これまで私たちの心の最良の感情を表わすため使われてきた言葉が濫用されていることです。フロベールの小説の人物は皆、エンマ自身も、魂や永遠、海や夕陽を見つめるとき心に訪れる崇高な気分について、詩や恋や何かより良きものを求める魂の渴望について語ります。しかしこれらはすべて、エンマ自身の言葉にせよ作者の筆によるものにせよ、意味のない美辞麗句にすぎないのです。（中略）フロベールの小説の読後感は普通の小説と違

います。何か嫌悪と軽蔑の入り混じる悪夢のように重苦しく、渴きを癒す一滴の水もない暑い日のように惱ましい——何か心を辱め想像力を驚かすものです。おそらくこうした意味で、フロベールの小説は道徳的とさえ言えるのです。》

19

文体に関しては、不自然で凝ったものだが言いまわしは軽やかで、粹、華麗なところもあり、簡潔な表現を好まぬ人には気に入られていると、限定的に評価した。そして最後に、小説に反映したフランス社会の病は回復する見込みはないのかと問うて評論を結んでいる。

トゥールの批評は作品の道徳性を批判し、小説にフランス社会の歪みの反映を見る、当時の「ボヴァリー夫人」評の典型的な例に属する。サゾーノフが、この小説で不道徳と言われているものがフランスのブルジョワの道徳性の反映であり、フロベールがブルジョワ社会と一線を画していることを読みとっていたのに対し、トゥールはそうした社会批判の要素を認めていない。しかしロマン主義の時代に育った彼女は、ロマン派の世代が崇めた諸価値が、エンマをはじめとする登場人物の紋切型の言葉を通して嘲笑されていることに、敏感に気づいている。またエンマが感覚だけの存在で明確な性格を持たず、小説に従来の劇のないことを指摘するなど、「ボヴァリー夫人」の人物造型や構成の新しさも嗅ぎとっている。サゾーノフとトゥールは同じ1815年生れであった。ゲルツェンの友人であったサゾーノフが、ロマン主義を脱し始めた世代の新しい社会的理解に立って小説を読んだとすれば、トゥールの批評には、ロマン主義に親しんだ人の、新たな世代の価値観や創作方法への異和感が表明されていたと言えよう。

彼女は1858年の「ロシア報知」9月号に掲載された「パリ書簡」のなかでも、「ボヴァリー夫人」に言及している。イタリアで読んだこの小説の不道徳さに驚かされたこと、それが当時のフランス社会の退廃の反映であり、フランス人自身これに同意していることなどを語っている。²⁰「ネートチカ・ネズワーノワ」や「虐げられた人々」について、同時代人としては秀れた理解を示す批評も書いた彼女は、「時代」誌にプルドン家の訪問記なども寄稿した、ドストエフスキイの知人であった。²¹ドストエフスキイの周囲にA. マイコフ以外に彼女のような人物がいたことも、注意してよい。

1858年の「ボヴァリー夫人」に関する記事は、トゥールのもの以外確認していない。この年に出されたという翻訳が、どの程度反響があったか不明である。しかし参照した主要な雑誌に言及した記事がないことから、あまり反響がなかった

と推測される。次に「ボヴァリー夫人」についての評言が見られるのは、1859年の「祖国雑記」3月号に載せられた「外国文学概観——フランスにおける現在の愛」である。これはミシュレの「愛」やスタンダールの「恋愛論」、バルザックの「結婚の生理学」、E. フェドーの「ファニー」など、当時のフランス文学に現われた愛の諸相を分析した評論で、論者は恋愛を物質主義が支配している例として「ボヴァリー夫人」に言及し、小説を高く評価して次のように言う。

《たとえばギュターヴ・フロベールの美しい小説を読んでみなさい。フランスの中産階級の内部の風俗図が、驚くべき正確さで繰り広げられるでしょう。この小説は実に美しい。一人ラブレーを除き、フロベールほど全体としても細部に関しても、このように有りのままの作品を書いたフランスの小説家はいない。(中略) フランスの批評家も社会も、この作品を十分評価していない。》²²

この批評で特徴的なのは、ボヴァリー夫人を道徳的見地から断罪していないことで、シャルル・ボヴァリーに同情しながら次のように彼女を擁護する。

《……しかし……しかしエンマに石を投げつけようとは思わない。彼女はほとんど罪人ではない。彼女は知性も成熟度も教育も、いささか愚かな夫よりはるかに秀れていて、それゆえ夫を愛することができないのだ。しかし若く情熱的なエンマの心は恋を求める。エンマは生来、彼女の内に尽きることなく豊かに与えられた愛を、燃やし尽くすことのできるような男を求めているのである。》

23

評者はサソゾーフやトゥールに比べてより文学的な観点から、柔軟な理解を示すのである。フランスでは単行本刊行後、57年6月頃から「ボヴァリー夫人」を危険視する見方が薄れたというが、²⁴ ロシアでも50年代末には美しい小説として評価する人物がいたのである。これは発表当初の騒ぎから時を経て、作品を客観的に見ることができるようになったことにも一因があろう。同じ評者H.Hは、「祖国雑記」9月号に載せられた「フランスのリアリズム小説：エルネスト・フェドー、『ダニエル』」の中でも、「ボヴァリー夫人」に言及している。彼は二人の分析の大胆さ、リアリズムについて、それが18世紀の好色文学と異なり、人生を有りのままに描くことを目差していることを指摘し、彼らの特徴がロシアの自然派に近いと言う。そしてフェドーの小説が主観的で、焦点が一人の人物、恋

愛感情だけに限定されているのに対して、フロベールの小説ではフランス社会全体が描かれていてより芸術性があると、次のように評価する。

《フロベール氏の作品には、フランス社会の特定のグループの生活全体が典型的に再現されている。(中略) あなたはこの小説で、ボヴァリー家の一日のすべてを知るだろう。(中略) そこから描写の豊かさと人物たちの迫真性が生れる。(中略) 「ボヴァリー夫人」の作者は、毅然として直載に金銭の問題に当たる。彼は金銭が人間の生活の重要な原動力の一つであることを隠さない。それゆえ彼の作品では登場人物が金を求め、獲得し、金ゆえに苦しみ、零落し滅びていくのである。》²⁵

フロベールのリアリズムがフランスの中産階級の典型的表現たりえており、そこに描かれたのが金銭の問題であると、前の論文に比べ社会性を強調した読み方をしている。評者はこの批評でも、フェドーと対比してフロベールを高く評価しており、スキャンダルの渦をくぐり抜けた「ボヴァリー夫人」が、その芸術性を客観的に評価されるに至ったことが感じられる。「ボヴァリー夫人」の作者としてのスキャンダラスな名声の背後に真の芸術家の存在を認めること、60年代以降のロシアのフロベール評に見られる一つのパターンの成立を、H.Hの批評は示しているのである。

(3) 「サラムボー」と1860年代

1860年代に入ると時事性が薄れてきたためか、「ボヴァリー夫人」に関する特別な言及は見当たらなくなる。²⁶代わって反響が現われるのは、1862年の11月末刊行された「サラムボー」に対するものである。即ち1863年の「祖国雑記」1月号には、無署名の書評「外国文学ニュース『サラムボー』、フロベールの新小説」が掲載され、つづいて同誌6・7月号にはこの小説のロシア語訳が載せられた。書評は12頁ほどの長さで、うち9頁は「サラムボー」の梗概に当たっている。

評者は始めに5年ぶりで発表されたフロベールの小説がフランスで評判になっていることを言い、作品の梗概を紹介する。そしてこの小説について、カルタゴの歴史小説として史料や研究書をよく利用して書かれているが、風俗、人種の外面的、考古学的記述ばかり詳細で退屈すると評する。またカルタゴ人の内面、精

神生活がほとんど描かれていないと、サラムボーについて次のように批判する。

《小説中で女性はヒロインのサラムボーだけだ。しかしこれは一体何という性格だろう。(中略)一言だけ言っておく。サラムボーの人格はまったく統一的な人格を成していない。これはごくわずかな内面しか持たない何か奇妙な人間だ。彼女の信仰は虚ろでまったく熱意を欠いている。真実の全き愛も彼女には見られない。——ただ何か感情的な衝動があるだけだ。この衝動が内面の葛藤を生み、彼女の欲求はすべてこの衝動を満たすことに向かう。フロベールがマテアリストであることを知らねば、こんな人物を生んだことに驚かされるだろう。小説に色々慎重を要する対象や状況を長々と描くわけは、彼がマテアリストであることによって説明される。》²⁷

そして最後に、フロベールの意図は真面目なものだが、社会道徳を無視した慎みのない描写によってスキャンダラスな成功を博する危険を冒しているのは非難しない訳にはいかない、と書評を結んでいる。

資料によく当たって歴史的事実には忠実であるが、風俗的な描写ばかりが過剰で人物が生きていず、社会道徳からはずれた描写もあるというのが全体的な評価である。同様な批判はフランスでもあり、当時としては標準的な批評だったと見られる。²⁸ サラムボーが断片的な感情が描かれるだけで人格的な統一が感じられないという指摘は、E. トゥールの「ボヴァリー夫人」評に通じ、フロベールの人間の描き方に抵抗を覚えたためと見られる。この書評には「ボヴァリー夫人」評にあったような明確な肯定、否定の口吻はなく、フロベールの久々の小説がフランスで話題を呼んだのに呼応して、梗概を付し紹介を試みたという性格が強い。

「祖国雑記」に載せられた「サラムボー」の翻訳には、訳者の簡単な解説が付されていた。しかし欠点はあるが注目すべき作品なので翻訳したと述べるだけで、作品の評価は特に行っていない。²⁹

翻訳に対する反響はあまり無かったようで、後に紹介するA. スヴォーリンの批評にも、ほとんど印象を与えなかったと書かれている。³⁰ 当時のロシアとおよそ無縁な古代カルタゴを舞台とした「サラムボー」が、読者の関心をひかなかったのは想像に難くない。むしろ時勢にそぐわぬそのような小説が、フランスでの発表後約半年のうちに翻訳された点に、フロベールの知名度の程がうかがえよう。

「サラムボー」の翻訳後、1864年から「感情教育」の反響が現われる1870年まで、フロベールを論じた記事は再び見られなくなる。³² そのなかにあつて、1868年ツルゲーネフがマクシム・デュ・カンの小説「徒勞」(Les Forces Perdues)に寄せた序文で、「ボヴァリー夫人」について「フランスの新たな流派の最も素晴らしい作品」と書いたのは、記すに値する。³³ わずかな記述であるが、著名な作家の言葉だけに多くの人の目に止まったようで、A.C.スヴォーリンも論文の中で言及している。³⁴

(4) 「感情教育」

1869年11月中旬発表された「感情教育」に対する反響は、ロシアでは翌70年に5つの批評と翻訳が出るという形で現われた。批評は高く評価したもの三つに批判したもの二つと相半ばしたが、そのなかで最も早いものにA.C.スヴォーリンの「ギュスターヴ・フロベールの新小説におけるフランス社会」(「ヨーロッパ報知」NO.1.2)がある。これは86頁もの詳細な梗概の前後に、5頁ほどの論評を付した記事である。スヴォーリンは始めにフロベールのこれまでの活動に触れ、「ボヴァリー夫人」がツルゲーネフが述べたように秀れた作品であること、「サラムボー」があまり感銘を与えなかったことを言う。そして「感情教育」について『Temps』紙のE.シェレルらが、作品のシニスムや政治をはじめあらゆることながら無関心で、理想や高潔な人物がいないと批判していることを紹介し、およそ次のように反論した。

——これはみな誇張であるか誤っている。芸術家の客観的態度がシニスムと受けとられたのだ。確かにフロベールは理想的な人物を描かない。彼は国民の多数を占める平均的なタイプだけで満足する。シェレルは、恋愛感情ばかり描いているように思わせる表題が内容にそぐわないと批判しているが、そのようなことはない。フロベールは、感情が理性や分別にまさる人物達を描いた。この感情や感受性の優位が、1840年代のフランスの政治的激動、不安定さの理由を説明するのだ。彼はこうしてフランス人の性格の発展の本質的特徴を捉えた。しかしフランスの批評家は彼の描いた性格の現実性を問わず、作品を不当に低く評価している。彼らは国民的自尊心が傷つけられたことを語っていて、これはツルゲーネフの「煙」に向けられたロシアの批評家の憤りを思わせる。実際「感情教育」はフランス人

に与えた印象の点で、「煙」を想起させる。冷静なリアリストは48年の革命からナポレオン帝政に至る政治的失敗、幻滅の理由を示し、その舞台を描いたのである。——³⁵

ついで小説の梗概を紹介した後、結びとして登場人物がロシア人に似ていることを次のように指摘する。

《フロベールの小説の人物とロシアの有名な小説の人物との比較が、読者に思い浮かんだかどうかかわからない。しかし彼らの多くが、我国の人間を思い起こさせる。特にフレデリック・モローはそうだ。彼は我国で40年代人として知られるタイプの見本ではないだろうか。あらゆる種類、形式の芸術に対する同じような傾倒、過剰な感情、目的を果たすために必要な率先性、根気が欠けていること、寛大な衝動と無関心、誠実さ、高潔さとそれに相応しからぬ行動とが説明し難く同居していること、などみな同じだ。(中略)彼は我国の読者におなじみのライスキイを思い起こさせる。もっともフロベールは、我国の尊敬すべき小説家よりさらに客観的に自分の主人公に対してているが、小説の他の人物たちも我々と無縁ではない。我国にも同じような運動が小規模ながら存在し、同じような理想が教宣者を獲得した。反動派の代弁者は、我国でもフランスとほとんど一言一句同じことを言っている。》³⁶

論題のとおり「感情教育」をもっぱら社会的見地から論じた批評で、小説の一つの柱をなすフレデリックとアルヌー婦人の恋については、まったく触れていない。当時の社会時評的文芸批評の典型的例と言えようが、指摘は概ね適切なものである。今日からは想像できない「感情教育」のフランスでの不評が、審美的理由だけでなく、人々の国民的自尊心を傷つけたためだと指摘しているのは的確で、これは今日のフロベール研究者も認めている。³⁷またフレデリックとロシアの40年代人や「断崖」のライスキイとの共通性を言っているのも面白い指摘で、後年ゴンチャローフが「感情教育」を「断崖」の盗作と書いた背景には、こうした評言もあったことがわかる。³⁸フランスでの不評に対し、スヴォーリンが留保抜きの高い評価を与えているのも特徴的である。70頁近い梗概が示すとおり、「感情教育」の内容紹介を主眼とした記事であるが、小説の発表後2ヵ月で詳細な梗概を掲載する速さには積極的な紹介の姿勢が感じられ、一部にフロベールの信奉者

がいたことを推測させる。実際この年の春出版されたと推測される「感情教育」の翻訳は、そうした熱心な出版者（А.Энгергард, А.Степановой）によるものであった。³⁹ 彼らは外国文学翻訳シリーズの第一冊目として刊行されたこの翻訳に、次のような序言を載せたという。

《フロベールの「感情教育」を世に出すにあたり、我々はこの翻訳シリーズを最も秀れた外国文学から始め、我国の多くの読書人楽しく興味ある読物を提供しようと考えた。そのため読者の判を仰ぐことになるシリーズ最初の小説として、独自性の際立つ小説を選び、読者諸子の趣味が十分満たされるよう願っている。》⁴⁰

「感情教育」の残り四つの批評は、この翻訳の出版に応じて書かれた。前述のように評価は分かれたが、肯定的に評価したものから紹介すれば、まず「暁」《Заря》誌7月号に載せられたニコライ・ストラーホフの書評がある。2頁強の短評であるが、ドストエフスキイの友人がフロベールを高く評価していて注目される。

彼は始めにフロベールの「感情教育」やユゴーの「笑う人」(L' Homme qui rit)のような真剣な芸術が、翻訳され読まれるのは心慰められることだと、翻訳の仕事が高く評価する。そしてレッシング以来のドイツの影響で、ロシアではフランス文学が見下されるようになっているが、フロベールやユゴーはドイツのB. アウエルバッハやF. シュピルハーゲンよりはるかに秀れている、フロベールは定まった名声をまだ得ていないけれども、十分それに価すると述べる。ついで彼の特色を、リアリズムとの関連からおおよ次のように言う。

——彼の主要な特徴は非常に確固とした冷静、客観的なリアリズムにあり、それは非の打ちどころなく芸術的である。リアリズムは最も初歩的な形態にあっては暴露的なものだろう。芸術家が日常生活を実際の通り灰色に描くのは正しい。しかし芸術家が作品の高尚な領域を拒否し、模写するだけになる理由は様々だ。芸術家は理想を求め、それ故それを信じて理想を控えるか、理想を失い、信じ無くなって理想を断つかどちらかだ。我々にはフロベールは後者に属するように思える。——⁴¹

そして「感情教育」については次のように論評した。

《「感情教育」ではフレデリック・モローの生活が語られるが、もちろんこれはフランス人の生活のごくありふれたタイプを成すものだ。彼は二流の田舎貴族の出身で、悪事も善行も働かない。名声や恋、快樂を求めながら何も根気よくやり遂げない。手に入れるのは時期遅れか不十分なもの、あるいは彼の弱さに損なわれたものだ。作者は驚くべき技量で、主人公が入り込む、彼が慣れもしなければ影響を免れることもできぬフランスの様々な生活領域を描く。至るところに非常な虚しさや好色、エゴイズムがあって、この社会が恐ろしくなる。そのうちに1848年の革命が前面に出てくる。その場面は仮借ないリアリズムで描かれている。善意の衝動と卑小でよからぬ情熱の入り交るこれらの情景はすべて、我々にフランス社会の、とりわけパリの多様な階級の完全といわぬまでも、非の打ちどころなく正確なイメージを与えてくれる。》⁴²

フロベールの名声がまだ定まっていないと述べているのは、フランスでの毀誉褒貶を反映した言葉と推測される。そうしたなかで彼をユゴーと並ぶ第一級の作家として扱っているのは、ユゴーが当時ヨーロッパで大作家とされていたことを思えば、非常に高い遇し方であった。またバルザック死後のフランス文学がロシアで軽視されている風潮を戒しめているのは、70年代に入って次第にフランスのリアリズム文学の紹介が本格化する気ざしを感じさせる。フロベールのリアリズムを、冷静で確固たる客観性を持つ点から芸術的と評した姿勢は、ストラホフが一見幻想的で抑制を欠いたかに見えるドストエフスキイの「白痴」より、「戦争と平和」をロシア文学のリアリズムに新たな期を画す作品としてより高く評価したことに通じている。⁴³ 実際、彼は「感情教育」に「戦争と平和」のブリエンヌ嬢のような人物が登場してくると指摘し、⁴⁴ また明確な性格や行動を欠くフレデリックをはじめとする登場人物が、従来のフランス小説の人物と異質であることなども述べている。ストラホフは、この頃西欧に滞在していたドストエフスキイに「暁」誌を送っており、ドストエフスキイもこの書評を目にしたことが推測される。

ストラホフの書評とおそらく同じ頃、「ジエーラ」誌7月号には「感情教育」に否定的な約7頁の無署名の書評が載せられた。評者は先に紹介した出版者の序言を引用し、この小説が序言の言うような独創的で興味深い読物か、次のように

反論する。

——この小説は、パリのボヘミアンの卑俗で無しつげな言葉で書かれている。ジャルゴンのようなこんな言葉を、独創的な言葉と呼ぶことはできない。確かにフロベールには観察力が認められるが、それは狭くて一面的だ。浮かれ女と伊達男の世界を描いた部分が最もよく描かれているが、しかしこれも造型的なもの、物質的なもの、即ち目につきやすく無教養な読者を喜ばすものがうまく描かれているだけだ。作品の思想が感情的な性格の教育の問題にあるとわかるのは、題によって、内容からはわからない。主人公がコレージュユに入る以前の家庭教育もはっきり書かれておらず、ごく平凡な教育を不思議にも感情的と形容するのである。—

—45

ついでフレデリックとデローリエの対照的な生き方を紹介し、さらにおよそ次のように言う。

——このような二人の生活を感情的な教育の所産と呼ぶのは、独創的どころか陳腐である。仮にそれが風刺だとしても、そのような子供じみた風刺はスミルノフ氏の「現代人の諸類型」(Смирнов. Современные типы)のなかぐらいにしかない。現代のフランス文学は新聞のフェリエトンの中に逼塞し、真面目な才能は歓迎されない。フェリエトンに真剣な思想は不要で、成功するには鮮やかな情景を次々に繰り広げる必要がある。才ある作家は、舞台上喝采を博する俳優と同じことをしなければならない。フロベールはそういう才能の一人なのだ。「感情教育」は確かに興味ある小説だが、それは卑猥なものを期待する人々にとってのことだ。小説は前置きなしに発端のエピソードから始まり、最後まで結末が予測できない。彼の小説はアクロバットのように面白い。フロベールはフランスでは成功を博するかもしれないが、ロシアでは違う。ロシアの読者の多くは小説に思想やテーマを求めるが、彼の小説にはそのどちらもないのだ。

—46

以上のように評者は、「感情教育」を卑猥な娯楽的読物と全面的に否定する。これが率直な読後感であったのか、進歩派の雑誌のイデオロギー的批判であったのか、批評文からは定かでない。しかし小説の題と教育のことがほとんど描かれぬ内容の乖離をあげつらう論調は、同様の批判がフランスでもあったとはいえい

ささかめはずれである。フロベールを喝采を求める俳優と同一視するのも、評者のフロベールに関する知識を疑がわせる。同時代のフランス文学をフェリエトン文学だと軽蔑的に語っているのは、ストラホフの指摘したロシア人のフランス文学蔑視に符合し、「感情教育」を軟文学とするのも、フランス文学が一般に好色、軽薄と見られた当時の風潮に沿ったものと見られる。また作品に思想やテーマがないと批判しているのは、後に紹介するJ・ネリュエボフが批判する、表立った思想を性急に求める態度に他ならなかった。ただし評者は、急進派の社会運動家を戯画的に描く「感情教育」の、見方によれば反動的な性格に触れていない。そのような社会性をこの小説に認めなかったのか不明だが、そうした明確なイデオロギー的批判を行なったのが、次に紹介する「祖国雑記」8月号のA.M.スカビチェフスキイの批評である。4頁ほどの短評で、「感情教育」をおよそ次のように論評している。

——おそらく出版者は、二月革命時のフランス社会の動向が描かれているのでロシアの読者に興味深く、有益だと考えたのだろう。しかしこの小説は安手の卑猥なフランス小説よりさらに有害だ。見識ある読者が小説に見出すのは無気力なペシミズムや、この世は虚しく、汚辱と退廃の巣窟でしかないと考える老いたブルジョワばかりだ。驚いたことに小説は、ピーセムスキイの「荒騒ぐ海」に酷似している。フレデリックは「荒騒ぐ海」のバクラーノフ同様小貴族の出身で、働きもせず出会った女性をわが物にすることを唯一の目的にしている。「荒騒ぐ海」のソフィヤ・レネヴァの役はロザネットが演じ、貞淑なエフプラクシャの役はアルヌー夫人が演じている。両者の小説の傾向も似ている。フロベールはピーセムスキイ同様、様々な党派や傾向から、これと対立する党派や傾向に対する否定的な見方ばかりをとってくる。貴族やブルジョワは急進派や民主派の視点から非人間的な存在に描かれ、急進派や民主派は貴族やブルジョワの視点から、ちょうどピーセムスキイのニヒリストのように描かれる。労働者はピーセムスキイの農民のように、粗野で無思慮な賤民とみられる。二人の違いは、ピーセムスキイが自分の属する階層の生活しか知らないのに対し、フロベールがパリの各階層をよく知っていることだけだ。フロベールはどんなに崇高な理想を抱こうと、それぞれの党派には卑劣な人間がいるのを知り、この点ばかりから各党派を描く。そのため彼の小説は、ピーセムスキイの小説以上に有害になる。人生の暗部ばかりをとりあげる類いの現実に対する忠実さが、読者を幻滅させるからだ。この本を読む

と、いかに進歩的な志向や党派の戦いであろうと人生は悪臭を放つ汚水溜のようなもので、少しでも快適に暮そうと気づかうばかりだという印象を与えられる。出版者は、こんな小説を外国文学の最も秀れた作品と考えたのだ。——⁴⁷

スカビチェフスキイはこのように、「感情教育」に色濃いペシミズムを人生の否定的面しか描かぬものと批判した。ネクラソフの「祖国雑誌」に載せられた書評だけに、「ジェーラ」の批評よりさらに鮮明なイデオロギー的批判となっている。それがよく表われているのが、「感情教育」と「荒騒ぐ海」との類似を指摘している部分である。二つの小説の人物配置が似ているというのは面白い指摘であるが、フレデリックを紹介する条りはパフラーノフとの共通性を言おうとするため歪曲されており、小説の類似はあくまで表面的な次元に止まる。肯定的な人物や主張を欠くフロベールの客観主義をペシミズムと批判するのは、フランスで同様の批判があったことから理解でき、またピーセムスキイが救いのない農民像を描いて同様の批判を受けていたことを思えば、両者に共通性を見ることは根拠のないことではなかった。⁴⁸しかしスヴォーリンがフロベールのペシミズムに作者の社会批判を見たのに対し、スカビチェフスキイはそのような建設的な批判性を認めない。ストラホフ同様、パリの多様な社会層がよく描かれているというのが唯一の誉め言葉で、小説の美的側面にはまったく言及しない。当時のイデオロギー的批評の典型と言えようが、この種の批判はフランスでも、左右の立場を問わず小説に何らかの教訓を求める批評家が行なったものであった。⁴⁹

スカビチェフスキイの批評と相前後して、「ロシア報知」NO.8には、J. ネリユーボフの「フランスの小説——ギュスターヴ・フロベールの『感情教育』」が載せられた。これまで紹介したフロベール評のなかで最も本格的な40頁を超す批評で、「感情教育」を高く評価していて注目される。長文の評論なのでいくつかの論点に絞り、要約と抜粋によっておよその内容を紹介する。

——フランス小説はロマン主義時代以来、歴史的事件や蕉眉の問題、異国の情景や異常な心理などを取り入れ、広範な美学的、社会的課題を担った小説の趣味をロシアにもたらした。しかしフランスの作家は修辞に走り、空想や感覚に訴えて、この課題を知的認識の点で十分果たさなかった。ゴーゴリやツルゲーネフ、トルストイ等の登場とともにロシア文学が仮借ない分析をはじめると、フランス文学の魅力は失なわれる。ロシア文学はイギリス文学に接近し、フランス文学と

対立するようになる。ドストエフスキイとU.シュー、ツルゲーネフとデュマ・子、トルストイとデュマ・父を同時に楽しむことはむづかしい。そうしたなかでフロベールのようなフランス文学の輝やかな特色と、代表的なロシア文学に見られる簡潔さ、自然さを合わせ持った作家を論ずるのはうれしい。

「ボヴァリー夫人」は感傷的な教育を受けた女性が、突然自由を与えられたため起きた出来事を描いた小説であった。「ボヴァリー夫人」や「感情教育」は、描かれた対象からすれば不道徳かもしれない。しかしそういう見方をすれば、モリエールやスウィフト、ゲーテも不道徳ということになる。フロベールの客観主義は、罪を理想化する「ヌヴェル・エロイズ」の信条とは異なる。彼の小説は非常に芸術的であり、仮借ないリアリズムの背後に潜む作品の本質を見ぬくことができれば、読者の道徳性を高めるものだ。——⁵⁰

《（「感情教育」という題で）作者の言いたいのは感情の訓育であること、作者にとって小説の核心が、人生の様々な状況で育まれる感情にあることは明らかだ。フレデリックのマリー・アルヌーに対する恋は、種々の成長の課程を歩んでいく。恋は一瞬の深い感銘から生まれ、この感銘は絶え間ない悩ましい夢想に移る。夢想は敬虔な崇拜に、そして燃えるような情熱に変わり、情熱は別離と不幸の試練に浄められて、ついには長年の苦悩の投影した不断の悲しい詩的な愛着に変わる。このおもむろな推移を描くのに、作者は温かく豊かな詩情を表現した。》⁵¹

——フロベールの詳細な描写はバルザックを思わせるところがあるが、彼は描写に溺れず、バルザックのようにロマン主義的な誇張や、メロドラマ的な恐怖に訴えない。受身の弱い人間を描くのに秀で、怒りや同情を見せず、皮肉に愚かな人々を描いて理想化と風刺の間で微妙なバランスを保つ点で、彼はむしろツルゲーネフに似ている。小説には、様々な人物の歩みが鋭い観察眼で描かれている。フレデリックの場合、アルヌー夫人への恋とデローリエとの友情の消長を通して、感情の教育が果たされる。アルヌー夫人は多少生彩を欠いているが、彼女のような崇高な人物を配し、他の人物と交わらせることを通して、作者は人々の卑小な本質を明らかにするのである。

フロベールはまた、40年代の政治情景を描いて心理分析を豊かにする。我々は2月革命を支配したフランス人の感情も、フレデリックの恋同様、教育の必要があったことを理解する。彼は政治の動向を描くにあたって、どの党派も仮借なく皮肉に描く。読者に特定の主義を押しつけたり何らかの救いを求めたりせず、

ここでもうかがえるのは意識的な芸術家の姿である。小説では青年の純粹な夢が、徐々に俗悪で気の滅入るような現実をもたらしていく。このペシミズが欠点であれば、我々は「感情教育」を擁護しはしない。しかしフロベールの客観性は、シェイクスピアやゲーテのように完全ではなく、同時代を描く作家が楽天的、あるいは悲観的であるのは避けられない。——⁵²

ネリユーボフはついで、フレデリックと過剰な野心を抱くデローリエの対比的な生き方を紹介し、セナクルの語る功利主義的芸術論が、ピーサレフのリアリスト論に酷似していることなどを指摘する。そして「両世界評論」のS. R. タイヤンディエの批評に見られる作品に直載な思想の表現を求める態度を批判し、作品の意味を次のように説く。

《しかし何のために詩に明確な思想を表現しようと望むのか。意図が明白であればあるほど純粹さが失なわれ、美的な効果は薄れる。作品の思想があらかじめ意図されていると、作品の詩趣はことごとく教訓主義に化し消え失せる。このため普通傾向的小説は、(肯定的人物であれ否定的人物であれ) それぞれの人物が薄っぺらなモラルと化し、互いに似た人物ばかりの小説になる。しかし思想は作品そのものの内部に生き、作品全体のうちに表現される。(中略) しかも多くの場合思想は、形式の豊かさと華麗さ、イメージの豊かさ、暖かな照明、高度な構成の技術のもとで、誇らかにしかし慎ましく、蔭深く潜み隠れる。命ある人々が活動し有るがままの生活が展開する、論理的な抽象物が出る幕のない舞台の前面で、思想が名指され金切声を上げることはないのだ。》⁵³

——この作品の思想はフレデリックの恋や芸術、政治的歩みを偏見なく眺めれば理解できる。フレデリックの性格や願望と、彼の置かれた社会的環境、時代の要求は常に対立している。彼はあることを望みながら、絶えずそれとは違うことを行なう。時代は粘り強い意志を求めているのに、彼はディレッタント的で明確な使命を持たない。正義と人間愛の理想を実現しこれに忠実でありえるのは、自分の欲望に反する義務を課して始めて可能になる。ところがフレデリックは、常に人生を折衷的に歩んでいる。彼は現代フランス生活の悲しむべき産物で、「ヨーロッパ報知」の批評家が指摘したように、ロシアの余計物を思わせる。余計者は最初の挫折で挫け、心秘かに自分は周囲の者より優っていると慰める。フランスの余計者の役割はロシア以上に悲しい。理想や明確な目的を持たず、自らの正し

さを信じてそれを追求しないのは、社会を蝕ぼむウジであり、社会を政治的陰謀家や冒険家の犠牲にする者だ。——⁵⁴

ネリユーボフの批評で注目されるのは、紹介した論点が「ジェーラ」やスカビチェフスキイの批判への反論、あるいはスヴォーリンやストラホフの指摘を受け継ぐ内容になっていることである。即ち「感情教育」という題の意味を説く部分は、「ジェーラ」の題名批判に対する反論となっており、作品のペシミズムを擁護し、小説の意味を、40年代のフランス人の感情過多に対する批判と説いている点は、スカビチェフスキイのペシミズム批判への反論となっている。性急に思想性を求める読み方への批判は、無思想的な娯楽的読物という「ジェーラ」の評価への反論と読めよう。一方、フロベールの叙述の客観主義を評価し、フレデリックと余計者の共通性を指摘する点は、ストラホフやスヴォーリンに通じている。これらの主張を通じて際立つのは、ネリユーボフが文学作品の有機的性格を十分認識し、作品を繊細に読みこんでいることである。そして詩的で抑制された叙述の背後に、意識的な芸術家フロベールの存在を読みとっていく。特に「感情教育」という題の意味を、フレデリックのみならず1840年代のフランス人全体のそれでもあると述べているのは、卓抜な読みと言えよう。また芸術作品と思想との関係を論じた一節は、セナクルの革命奉仕のための功利的芸術論が、ピーサレフの主張と似ていることを指摘するところからもうかがえるように、当時のロシアの批評傾向に対する文学の擁護の一面があったと考えられる。以上のようなネリユーボフの批評は、1860年代、急進派の批評に押されて逼塞していた本来の文芸批評が、あるいは見方によっては50年代の審美派の系譜をひく批評が、こうした外国文学の批評に生き続けていたことを感じさせる。ネリユーボフは当時まだ25才の青年であったが、専門の文芸批評家でなく、音楽研究者の彼が最も優れた批評を書いているのは皮肉であった。イデオロギーにとらわれず、虚心に作品に対したためと考えられるが、1870年代初当にロシアでフロベールがどのように読まれたかよく物語る、今日でも読むにたえる論文と評価できよう。

以上5つの「感情教育」評で特徴的なのは、急進派の批評と反急進派の批評の間で、作品の評価がはっきり二分されていることである。スヴォーリンを除く4つの批評が、お互いの批評を読んでいたか定かではなく、出版者の序言に対する賛否が、評価の出発点になったと推測される。⁵⁵ 当時フランスでは普仏戦争間近という政治情勢の影響もあって、「感情教育」に関する批評はほとんどなくなっ

ていた。⁵⁶フランスでの論議の余波を受けて書かれた、かつての「ボヴァリー夫人」や「サラムボー」評と異なり、スヴォーリンのものを除く4つの批評はロシアでの独自の論議といえた。両者の明白な対立は、フローベルの評価に関してもイデオロギー的な対立を免れず、また前述のように審美派と功利的芸術論者の対立が所を変えて続いていたことを感じさせる。特にストラホフやネリュエボフの積極的な評価には、芸術家フロベールを称揚することを通して文学の擁護を行なった趣きがある。スヴォーリン等三人は、フロベールをフランスの批評家以上に高く評価したが、これはフランスでの評価がその時代の社会状況に大きく左右されたのに対し、ロシアではより客観的に評価できたこと、ストラホフの批評に見られるように、一つの作品に5年近く費やすフロベールの創作態度が、良心的と好感を持たれていたことによる。ゴンクールやドーデ等フランスのいわゆるリアリスト作家の紹介がロシアで本格化するのには、70年代半ばのゾラの「パリ書簡」以降である。しかしフロベールに関しては1870年の時点で、ツルゲーネフが述べた「フランスの新たな流派の代表者」たる地位をロシアでも固めたと言えよう。

その後の翻訳の活発さは、そのことをよく示している。⁵⁷註5の年表に示したように、1881年までに彼の主要な小説のほとんどが翻訳された。特に注目されるのは、58年に続いて「ボヴァリー夫人」の翻訳が81年に出されていることである。これがフロベールの死の翌年であったのは恐らく偶然ではなく、多くの芸術家同様、作家の死が作品評価の確立の契機になったと推測される。内容からすれば検閲不許可となるのも不思議でない「ボヴァリー夫人」が、自由な時代ではなかったこの時期に出版できたことは、フロベールの評価がロシアにおいても確立し、この小説が同時代の文学の古典たる地位を獲得するに至ったことを示すものと言えよう。「ブヴァールとペキシユ」の翻訳ともあいまって、81年の時点でフロベールの初期の紹介は終了したのである。これらの紹介が英独に比べ10年以上先行していたことは、年表に示した通りである。もちろんロシアの知識人、文学者は直接原典や外国の雑誌を読んでおり、以上の調査はそのままロシアでのフロベールの読まれ方を反映するものではない。この紹介の早さは、あくまでロシアのジャーナリズムの外国文学紹介の活発さを表わすもので、フローベルが実際どれだけ当時のロシア作家に影響を与えたかは、また別の研究が必要であることは言うまでもない。

(5) 結び

さて本稿の調査はもともと、「白痴」における「ボヴァリー夫人」の登場の意味を考える準備作業として行なわれたものであった。最後にここで、ドストエフスキと「ボヴァリー夫人」との関わりについて簡単にまとめておきたい。

「白痴」が発表された1868-9年当時、フロベールは「ボヴァリー夫人」や「サラムボー」の作者としてある程度知られていたが、一般読者にとって「ボヴァリー夫人」は、なかば名前だけの作品であった。しかし一部の文学通、愛好家の間にフロベールやこの小説を評価する人々がいたことは、先に触れたツルゲーネフの言葉やゴンチャロフの回想、これまで見てきた「感情教育」評から推測できよう。⁵⁹ドストエフスキに関して言えば、「白痴」に「ボヴァリー夫人」を登場させる直接のきっかけとなったのが、1867年7月のドレスデンでのツルゲーネフ訪問にあったことはよく知られている。しかしこれまで見てきたように、ドストエフスキはツルゲーネフによってこの小説のことを知ったわけでは恐らくなかった。ロシア人のものではないので本稿では触れなかったが、彼が紹介文を書いたという「フランスにおける最近の文学動向概観」(R. ウィリアム)には、リアリズム作家としてのフロベールや「ボヴァリー夫人」への言及がある。⁵⁹またサゾーノフの二つめの「ボヴァリー夫人」評が載った1857年の「祖国雑記」

(No.7)には、ドストエフスキの「小英雄」も載せられていた。彼は60年代前半この小説を著作集に再録するさい加筆しており、この雑誌を持っていて、サゾーノフの記事も目にしていた可能性が高い。またA.マイコフやE.トゥール等ドストエフスキの知人が、「ボヴァリー夫人」に触れていたことも紹介した通りである。特にマイコフやストラホフは、「白痴」執筆中のドストエフスキが最も頻繁に文通していた友人であり、彼らがフロベールに言及していたことは、ドストエフスキの周囲に、「ボヴァリー夫人」が登場する意味を受けとめることのできる人々がいたことを示している。⁶⁰

以上のように、ドストエフスキが何らかの意図をこめて「ボヴァリー夫人」を「白痴」で利用する土壌が、限られた範囲ながらロシアにもあったことが確認できる。ではもしそのような意図があったとすれば、それはどのようなものだったろうか。この点についてはまた稿を改めて論ずることにしたい。

(註)

- (1) Ф.М.Достоевский. Полн. собр. соч. т.8. М., 1974. сс.343-4.
- (2) Л.П.Гроссман. Семинарий по Достоевскому. М.,1922. с.10. エピソード的に数行触れるものはいくつもあり、ナスターシャの死の伏線となっていることを指摘するものが目につく。日本では早くは中村光夫が「笑いの喪失」で(筑摩版全集.巻10. PP.116-7,「文芸」昭和23年7月号.初出)、また近年では新谷敬三郎先生が、「白痴」を読む(白水社.1977.P.86.)で触れていらっしゃる。
- (3) 最大の理由は、「白痴」の創作ノートをはじめとしてドストエフスキイが書き残したものに、フロベールや「ボヴァリー夫人」に言及した記録がほとんどなく、この問題について考える直接の手がかりがないため。
- (4) 参考にした資料は、直接参照できた「現代人」、「祖国雑記」、「ロシア報知」、「ヨーロッパ報知」、「時代」、「世紀」、及び次の二書に拠る。
Dikson-Mezer-Raginski. Bibliograficheskie ukazateli perevodnoj belletristiki.London.,1971.p.46.
Н.Н.Мостовская.И.С.Тургенев и русская журналистика 70-х годов XIX века.Л.,1983. с.176. ディクソンの書誌は、資料が当時の単行本及び主要な雑誌に限られ、新聞及び群小雑誌、地方誌紙は含まれていない。本稿の概観は両首都の主要雑誌に基くおよその概観に止まる。また「白痴」発表後の1870年までを扱うのは、本文で触れるようにロシアでは1860年代後半フロベールに言及した資料が少なく、「感情教育」評を通して「白痴」執筆当時のフロベールの知名度、評価を推測するためである。
- (5) 英独でのフロベールの翻訳に関しては、以下のものに拠る。
Annie Rouxelle. The Reception of Flaubert in Victorian England, 《Comparative Literatur Studies》,1977.No.3.
Tim Parke. Flaubert Devant La Critique Britanique, 1857-1865., 《Revue de Litterature Comparee》,1985.No.3.
Freienmuth Von Helms. German Critism of Gustave Flaubert,1857-1930.New York.,1939.
なお年表では英独のフロベールの紹介記事については省略している。1858

年の「ボヴァリー夫人」の翻訳は、1971年度版BCEのフロペールの項によるが、単行本であったか雑誌掲載のものか不明。また1873年の「感情教育」の翻訳はディクソンの書誌によるが、70年の翻訳の再版か、別のものか、やはり不明。ディクソンの書誌には58年、70年の翻訳は記載がない。

	ロシア	イギリス、ドイツ
1857	H.サンノラの「ボヴァリー夫人」評(「祖国雑記」No.5,7) 「ボヴァリー夫人」翻訳申請(検閲:A.ヌイコフ) E.トウールの「ボヴァリー夫人」評(「ロシア報知」No.7) 「バリ書簡」(E.トウール:「ロシア報知」No.9) 「ボヴァリー夫人」露訳 「フランスにおける現在の愛」(「祖国雑記」No.3.) 「フランスのリアリスム小説」(「祖国雑記」No.9.)	1857 「ボヴァリー夫人」(仏語版,独)
1858		1858 「ボヴァリー夫人」(ウイーン, 独訳)
1859		
1862	「仏第二帝政の文学」(R.ウイリアム:「時代」No.3.)	
1863	「サラムボ」評(「祖国雑記」No.1) 「サラムボ」露訳(「祖国雑記」No.6~7)	1863 「サラムボ」(独訳, 仏語版, 独)
1868	「徒勞」序文(ツルゲーネフ)	
1870	A.スゾーリンの「感情教育」評(「ヨーロッパ報知」No.1~2.) 「感情教育」露訳 「感情教育」評(但:ストラーホフ:「暁」No.7, 「ジエーラ」No.7, スカヒチュエフスキ:「祖国雑記」No.8, J.ネリユーボフ:「ロシア報知」No.8.) 「感情教育」露訳 「聖ジュリアン伝」(ツルゲーネフ訳, 「ヨーロッパ報知」No.4) 「フロテイト」(同上, No.5.) 「聖アントワーヌの誘惑」露訳(80年発禁)	
1873		
1877		
1879		
1881	「ボヴァリー夫人」 「ナヴァールとペキツシュ」露訳	
1882	「サラムボ」露訳	1886 「ボヴァリー夫人」(英訳) 「サラムボ」(英訳・2種類)
1888	「サラムボ」露訳	1894 「ボヴァリー夫人」(仏語版, 独)
1892	「純な心」露訳	1895 「聖アントワーヌの誘惑」(英訳)
		1896 「ナヴァールとペキツシュ」(英訳)
		1898 「感情教育」(英訳)
1896-8	4巻本フロペール著作集刊行	1904 「感情教育」(独訳)

- (6) К. Штахел. Французские журналы, книги и брошюры. январь, февраль, март. 《Отечественные записки》, 1857. No. 5. отд. IV. с. 3.
 なおК. ШтахелはН. Саゾーノフのペンネーム。
- (7) 山川篤. 「フロベール研究: 作品批評史 1850~1870」, 東京. 1970. pp. 33-34.
 なおフランスでのフロベール評価については、もっぱら同書を参考にした。
- (8) К. Штахел. Французские журналы, книги и брошюры. апрель, май, июнь. 《Отечественные записки》, 1857. No. 7. отд. IV. с. 48.
- (9) Там же.
- (10) Там же. с. с. 45-47. 以下要約による内容紹介には——を付す。
- (11) たとえばクールベについては次の本を参照。
 T. J. Clerk. Image of the People: Gustave Courbet and 1848 Revolution. London., 1973.
- (12) Саゾーノフについては下記、及び註15を参照。
 Franco Venturi. Studies in Free Russia. tr. by F. S. Walsby, M. O' Dell. Chicago-London., 1983. chapter IV.
- (13) フロベールに比べてシャンフルーリを評価するのは、当時としては特異な例に属するという。(山川篤. 前掲書. P. 111参照)
- (14) バルザック的な小説と異なり、語り手による意味づけが与えられぬフロベールの描写の新しさについては、下記の書を参照。
 H. M. Steel. Realism and The Drama of Reference. London., 1988. P. 18.
 また山川篤. 前掲書. pp. 198-99. によれば、この小説にロマネスクな要素が欠けている理由として、従来の筋に代わり場面が、性格に代わり気質が構成要素となったことが指摘されている。
- (15) А. И. Герцен. Собр. соч. т. 10. М., 1956. с. 330.
 Michel Cadot. L'Image de la Russie dans la vie intellectuelle Francaise (1839-1856). Paris., 1967. p. 34.
- (16) И. Айзеншток. Французские писатели в оценках царской цензуры. в кн. Литературное Наследство. т. т. 33-34. М., с. 826.
- (17) この評論には、前置きとしてロマン主義を脱する作風を持つバルザック、

スーリエ、G.サンド、スタンダール等についての概観があるが、フロベールに関する部分に限定して紹介する。他の記事の紹介も同様である。

(18) Е. Тур. Нравописательный роман во Франции—Madame Bovary, moeurs de province, par Gustave Flaubert. 《Русский вестник》, 1857. No. 7. отд. I. с. 280.

(19) Там же. с. 283.

(20) Е. Тур. Парижские письма. 《Русский вестник》, 1858. No. 9. отд. I. с. 18.

次のような一節がある。

《演劇や小説は私の社会の理解を助け、次に社会が私に劇や小説を説明してくれました。イタリアでフロベールの「ボヴァリー夫人」を読んでも、私に理解できたのは小説の度はずれた不道德さだけでした。パリで私はこの小説の成功と大きな社会的意義がわかりました。それは中産階級の正確な少しも誇張のない道德図であり、フランス人もこのことに全く同意しています。》

(21) И. И. Замотин. Ф. М. Достоевский в русской критике. ч. 1. 1846-1881. Варшава. 1913. с. 41.

(22) Нынешняя любовь во Франции. 《Отечественные записки》, 1859. No. 3. отд. IV. с. 24.

なおこの記事には文末に、H・Hと略記された署名がある。この時期「祖国雑記」にこの署名で寄稿していた人物には、D. D. Дудышкинがいて、審美派に属して仏文学にも通じていたことから、彼の評論である可能性もある。

И. Ф. Маснов. Словарь псевдонимов русских писателей, ученых общественных деятелей. т. 2. М., 1957. с. 225. 参照.

(23) Там же.

(24) 山川篤. 前掲書. P. 161.

(25) Реалистический роман во Франции. E. Fedeau, Daniel. étude six parties.

《Отечественные записки》, 1859. No. 9. отд. IV.

с.116.

- (26) 山川篤. 前掲書. P.195.によれば、フランスでも1860年10月から「サラムボー」が出る1862年暮まで、「ボヴァリー夫人」についての批評は見られなくなるという。
- (27) Новости иностранной литературы. — Саланво. новый роман Флобера. 《Отечественные записки》, 1863.No.1.отд. 3.с.72. この書評は無署名。
- (28) 山川篤. 前掲書. PP.256,258,262.参照。
- (29) 《Отечественные записки》, 1863.No.6.с.517.
- (30) А. Суворин. Французское общество в новом романе Густава Флобера. 《Вестник Европы》, 1870.No.1.с.272.
- (31) このす早い対応の一因に、「ボヴァリー夫人」の場合同様、フランスでの反響に対する社会的関心があったことは言うまでもない。
- (32) 筆者の参照した資料に関する限りでは、彼の名に言及するものが散見されるだけで、具体的に論じた記事はない。
- (33) И.Н.Тургенев. Полн.собр.соч.т.10.М.1982. с.349.
- (34) А. Суворин. Указ. соч.с.272.
- (35) Там же.сс.272—5.
- (36) 《Вестник Европы》, 1870.No.2. с.822.
- (37) 山川篤. 前掲書. P.475
- (38) И. А. Гончаров. Собр. соч.т.7.М.1980.с.376.
- (39) 翻訳の書評が雑誌の7-8号に載ったので、それより少し以前の春頃の出版と推測される。
- (40) 引用は註47のスカビчевスキイの書評中、P.212に引かれたものによる。
- (41) Н. Страхов. Библиография. 《Заря》, 1870. No.7.с.122.
- (42) Там же.сс.122-123.
- (43) Н. Страхов. Критические статьи об И. С. Тургеневе и Л. Н. Толстом. 1887.с.245.

- (44) Н. Страхов: Библиография. с. 122.
- (45) Иностранные беллетристы. Густав Флобер. Сантименталиное воспитание. 《Дело》, 1870. No. 7. сс. 101-102.
- (46) Там же. сс. 106-108.
- (47) А. М. Скабичевский. Иностранные беллетристы. Густав Флобер. Сантименталиное воспитание. 《Отечественные записки》, 1870. No. 8. отд. II. сс. 212-215.
- (48) たとえば以下の二つの論文を参照。
Н. А. Добролюбов. Собр. соч. т. 6. Л.-М., 1963. сс. 335-336.
М. Е. Салытыков-Щедрин. Собр. соч. т. 5. М., 1966. сс. 196-198.
- (49) 山川篤. 前掲書. pp. 429, 451. 参照. また同書 p. 464 によれば, 6月蜂起に対するフレデリックの傍観者的態度は, やはりフランスの反政府系の新聞の反をかったという.
- (50) Л. Нелюбов. Роман во Франции. — L'education sentimental. par. Gustave Flaubert. Paris. 1869. 2 vols. 《Русский вестник》, 1870. No. 8. сс. 640-642.
ネリユーボフは筆名で本名は Г. А. Ларош (1845-1904). 後に音楽研究者として知られる.
- (51) Там же. с. 652.
- (52) Там же. сс. 653-659.
- (53) Там же. сс. 672-673.
- (54) Там же. сс. 674-682.
- (55) Скабичевский или «Жеэра» の批評が, この序言への反論として書かれていること, ストラホフ, ネリユーボフも序言を意識していることから.
- (56) 山川篤. 前掲書. p. 470.
- (57) 「感情教育」の翻訳後「三つの物語」の翻訳まで, 約7年の空白があるが, この間フロベールは, 小説は「聖アントワヌの誘惑」しか発表していない.

この小説の翻訳が本国より5年遅いのは、検閲のせいもあったことが推測され、実際1879年の翻訳も出版後発売禁止となり焼却処分された。この点については、Л. М. Добровский. Запрещенная книга в России 1825-1904. М., 1962. с. 139. 参照。

- (58) ゴンチャロフが1875-76年頃書いた《Необыкновенная история》には、「断崖」の出版以前、すばらしい小説なので「ボヴァリー夫人」を読むよう、人から薦められたエピソードが語られている。И. А. Гончаров. Указ. соч. сс. 375-376. 参照。
- (59) 《Время》, 1862. No. 3. отд. I. с. 183.
- (60) ドストエフスキイはまた流刑中の文学的空白を埋めるため、あるいは雑誌の編集者として、50年代末から60年代前半諸雑誌をよく読んでいた。E. トゥールをはじめとする「ボヴァリー夫人」関連の記事を読んでいた可能性がある。